57

曲直瀬玄朔の門人について

山田　恵美
日本鍼灸研究会

【緒言】 曲直瀬玄朔（1549–1631．以下，玄朔と略す）は，初代曲直瀬道三（1507–1594．以下，道三と略す）の設立した学舎・啓廸院を継承し，後進の育成に努めた医家で，門人に饗庭東庵（1621–1673），岡本玄冶（1578–1645），井関玄悦（生没年不詳），野間玄琢（1590–1645），山脇玄心（1597–1678），井上玄徹（1602–1686），長沢道寿（未詳–1637），奈須恒昌（1593–1679），曲直瀬玄鑑（1577–1626）がいる．以下，これら 9 名の門人の医学的著作とその伝存の形態（刊写の別，重刊本や写本の点数），存否について，日本古典籍総合目録データベースなどを用いて調査し，それらからうかがえる，玄朔や門人の著作の傾向や影響関係について検討する．

【門人の著作】 人名の後に著作部数と刊写の内訳（写本のみの著作を明示するため，刊本と写本の両者が伝存する場合は，刊本のみとして換算し，不明なものは何も記さなかった）を，書名の後に刊本の重刊回数と写本数を（「刊：2 回」は重刊回数が 2 回，「写：1 部」は写本が 1 部，「刊」のみは重刊本無しを示す）それぞれ記した．なお，井上玄徹，井関玄悦の著作は確認することができなかった．

饗庭東庵（3 部［刊 2，写 1］）:『経脈発揮』（刊，写：3 部）．『諸家脈位考』（刊）．『素問標註諸言草稿』（写）．

岡本玄冶（16 部［刊 10，写 6］）:『医要方林』（写）．『家居医録』（写）．『家伝預薬集』（刊，写）．『経験医按』（刊．［寛政 6 年刊］）．『玄冶方考』（刊）．『玄冶薬方口解』（刊：2 回，写）．『傷寒衆方規矩』（刊）．『燈下集』（刊：3 回，写：2 部）．『八段坐功図』（刊，写）．『玄治百一方』（写）．『玄治目付之書』（写：2 部）．『日用巧方』（刊：3 回，写）．『玄冶得効配剤』（写）．『玄冶配剤口解』（刊）．『玄冶秘授口訣集』（写）．『古今方彙』（刊：6 回，写：1 部）．

野間玄琢（2 部）:『群方類稿』，『医学類篇』（『日本医学史』による）．

山脇玄心（5 部［刊 1，写 4］）:『奇効雑方』（写）．『原病式集解』（写）．『四家禁方』（写）．『勅撰養寿録』（刊，写）．『附方分類』（写）．

長沢道寿（10 部［刊 3，写 7］）:『医方口訣集』（刊：2 回）．『愚按口訣』（刊）．『増補能毒』（刊）．『藪門医案実録』（写：2 部）．『藪門家医術学習』（写）．『治例問答』（写）．『道寿先生医案集編』（写）．『藪医問答』（写：3 部）．『宗三配剤』（写）．『筑舟夜話』（写：2 部）．

奈須恒昌（2 部［刊 1］）:『医方聚要』（刊：3 回，写）．『薬方彙纂』（『本朝医家著述目録』による）

曲直瀬玄鑑（2 部［刊 1，写 1］）:『亀谿傷寒要方』（写）．『袖中集』（刊）．

【考察】 玄朔の著作数は 58 部（刊本：24，写本のみ：30，不明 4）あるのに対し，門人 9 名の著作は合わせても 40 部（刊本 18，写本 19，不明 3）ときわめて少ない．玄朔の著作は，医方書，処方集，鍼灸書，養生書，食養と広範にわたっているが，脈書はみられない．一方，門人の著作には，医方書や処方集とみられるものが多いが，脈書のない点は玄朔と共通する．こうした傾向は，脈診を重視し，脈書を遺した道三とは異なるが，この点はさらなる検討を要す．なお後世方派の医家の著書に「経験」「傷寒」という言葉が使用されることは稀で，上記以外でも，曲直瀬正純の門人・古林見宜の『見宜堂経験方』（江戸後期写）を挙げることができる程度である．（「経験」の付く 2 書が，いずれも江戸後期のものである点に留意すべきであろう）．なお，「傷寒」に関心を持った岡本玄冶と曲直瀬玄鑑は歳が一つ違いであるためか，お互いに強く影響しあっていたことを見て取ることができる．